

麥谷邦夫編

中國中世社會と宗教

道氣社

# 目次

はしがき

孝と佛教

眞父母考——道教における眞父母の概念と孝をめぐる——

五六世紀の佛教における破戒と異端

道観における戒律の成立——『洞玄靈寶千眞科』と『四分律刪繁補闕行事鈔』——

六朝靈寶經に見える本生譚

中世通儒考

都講の再検討

則天武后乃至玄宗朝における唐詩・山水畫の成立と六祖慧能の禪

中世の數學と術數學——科學と宗教の習合點をめぐる——

吉川忠夫 1

麥谷邦夫 19

船山 徹 39

都築晶子 59

神塚淑子 83

木島史雄 107

古勝隆一 141

荒牧典俊 163

武田時昌 203

一般語彙索引

固有名詞索引

## 中世の數學と術數學——科學と宗教の習合點をめぐって——

武田 時昌

### はじめに

科學文明の發展段階を考えるうえで、占星術、鍊金術、呪術的醫療は、非科學的俗信から科學的合理性がどのように認識されたかを判斷する一つの尺度を與えるものにはがいない。しかし、それらが自然科學の發達を阻害するマイナス面ばかりではなく、人々を自然探究へと向かわせ、科學的發見のきっかけを與えることもあれば、人々に科學知識とその有用性を啓蒙する役割を果たすこともある。

似て非なる側面を斥けつつ、科學的な貢獻のあったことを認めて、擬似科學という言い方をすることもある。しかしながら、理論的誤謬が證明済みでなかった當時において、精密科學との境界線がはっきりと認識されていたわけではない。むしろ両者が渾然と複合した學問分野を形成しており、しかも自然科學の應用である、その世俗的な部分に社會的影響があるのであれば、科學性を見出すだけでは不十分である。

今日の場合において、サイエンスとは隔絶された占いがすっかり廢れたわけではない。テレビや雑誌での取り扱い状況を見れば、日常的なレベルでこれほど一般的に流行した時代はないと言ったほうが妥當であるかもしれないくらいである。科學的眞理の發見によって、擬似科學が正體を暴かれ、衰退していくものではないという命題すら成立するかもしれない。そうであるならば、知恵ある人間の文化的な營爲の一つとして、占いやまじないを捉え直すことも必要である。

心理學、社會史の立場から、人々が占いを愛好する心理要素、信じ込ませる社會概念を分析的に考察するのも悪くはない。同時に、自然科學や宗教の聖域には立ち入らない占術の通俗性は、それらとの間に何らかのバランス關係を保ちつつ、兩者を結びつけているユニークな役割を果たしていることに、着眼してみたい氣がする。

科學と宗教というのも、宗教から科學へという科學革命の歴史觀によつて、對立關係だけが強調されているが、必ずしもそうであつたわけではない。宗教に従事する人物が自然科學や占術に通じていたことを示す逸話が數多く残されている。それは、他の職種よりもより強い關心を抱いていたこと、そして人々にもそうした能力者と見なされ、それが崇拜の神祕性を少なからず生じせしめていたことの反映である。理論のレベルで考えても、宗教的教義や科學的眞理に互いに對抗することに力點が置かれるのではなく、自然界と心的世界にアナロジカルな關係性を見いだそうと、相補的に働きあふことのほうが多かつたのである。そのように考えれば、科學と宗教の關係性を議論する手がかりは、占いの文化史、思想史に潜んでいると言えるだろう。

中國の場合には、占いが科學理論と複合的に絡み合つた術數學という特有の學問分野を形成した。術數學が數多く世に出されるようになったのは、三國時代から唐に至る中世の時期である。『隋書』經籍志三の五行類には、「二百七十三部、合一千二十二卷」の著作が收められており、『漢書』藝文志と比べて、古史、雜史類とともに著

しい増加傾向を示しており、中世の學術の際立った特色の一つにちがいない。

術數學の學問的な輪郭は、十分に把握されているとは言い難い。その要因の一つには、内容が通俗的であるために、當時にはよく讀まれたものでも、貴重書として後々まで伝えられることが少なく、著者の事績もあまり語られなかったことが挙げられる。しかし、占術の理論發展性を考慮するならば、書物が傳わらなくても、占術の數理そのものは後代の書に存在するものと大差なく受け継がれており、理論的な根幹部分は十分に推尋することができるのである。その特色づけを困難にさせているのは、むしろ當時の科學文化や宗教文化との關わりを、十分に考察していないところにあるように思われる。

そこで、本稿では、科學知識の傳播や宗教文化との關わりを視界に入れながら、中國中世における數學（算術）と術數學（占術）との間にどのような關係があつたのかを、具體的な様相を窺うことで考察してみたい。

一

術數學の中世的展開を考察するうえで、『魏書』術藝傳に注目すべき人物の序文が掲載されている。それは、「陰陽・術數を好んだ」殷紹が著した『四序堪輿』という術數書の序文である。

それによれば、殷紹は、姚氏（後秦）の時代に成公興に「九章要術」を學び、彼に従つて釋曇影のもとに行き、成公興が去つた後も止まり、釋曇影に「九章」の教えを請うた。さらに釋曇影に連れられて、法穆に會い、二人から「九章數家雜要」の講述を受けた。また五臟六腑、心髓血脈の醫學知識、商功（體積計算）の大算端部の算術、自然、天象の變化による天文占、土圭、周髀の三角測量術などを學んだ。四年後、彼等の先師和公が注釋した「黃

帝四序經文」を傳授してもらい、さらに山居して數年間それを尋究し、甲寅の年に下山した。景穆帝からその要略を撰録する敕命を受け、抄撮して『四序堪輿』を集成したが、未だ獻呈しないうちに崩御に遭い、それから八年経つてようやく奉った。

太武帝の長子である景穆帝が崩御したのが正平元年（四五二）、殷紹が『四序堪輿』を獻上したのは、それから八年目の太安四年（四五八）夏のことである。下山してから「自爾至今四十五年」とあるのを逆算すれば、下山した「甲寅之年」は北魏神瑞元年甲寅歲（四二四）に當たる。

殷紹の學んだ「九章」とは、言うまでもなく『九章算術』のことである。「九章數家雜要」とあるのは、當時には『九章算術』を注解した諸説が存在したことを示唆する。『隋書』經籍志には、劉徽注以外にも、徐岳等の注釋書を著録するが、諸家の注解が研究對象となっていたのが字句通りであれば、きわめて注目すべきである。

成公興は、字は廣明、自ら膠東の人と稱し、「山居隱跡し、人間（俗世）に在ることを希」つた隱者である。殷紹が彼に連れられて行った釋曇影は、陽翟九崖巖に隱棲する沙門であり、さらに釋曇影と訪れた法穆は、長廣東山に隱棲する道士であった。

游遁大儒と呼ばれた成公興には、後述するように、新天師道の開祖である寇謙之に仙術を教えた仙人傳説が残っているが、その逸話からも彼が數學に通曉していたことが窺える。釋曇影は、鳩摩羅什が長安に至った時に付き従った弟子で、『法華義疏』四卷、『中論』の注釋書を著した後に、「山棲隱處し、節を塵外に守り、功を修め善を立て、愈々老いて愈々篤し、晉義熙中（四〇五―四一八）に卒す、春秋七十なり」（『高僧傳』卷六）とあるから、時期的にはちょうど重なっている。

法穆については未詳であるが、成公興や釋曇影といった仙道、佛門で高名な人物が數學研究を通して親密な間

柄であったことが、三人から學を授けてもらった殷紹の口から直接に語られているのは、實に興味深い。

當時、北朝には、最初の道教教團を組織した人物が出た。新天師道を興した寇謙之である。彼は高山で修行をし、太上老君の降下に遭って、天師の位と「雲中音誦新科之誡」を授かったが、それは殷紹が下山した翌年の神瑞二年(四二五)一〇月五日のことである。仙道の修行を行うようになったきっかけは、成公興との不思議な出会いにある。すなわち、『魏書』釋老志に記された二人の逸話のあらまはは、以下の通りである。<sup>1)</sup>

寇謙之は姨母の家で働いていた成公興が頑強な身體で倦まずに働くのに目をつけ、姨母に頼んで貰いうけて、使役人として連れて歸った。彼が樹の下で算術計算を行っている時、野良仕事に精を出す成公興が時折覗きに來る。力作していればよい、なぜ見に來くるのかと咎めても、二三日経つと、再びやって來てやめない。寇謙之が七曜の星算がわからなくて茫然としていたら、成公興がどうしたのかと尋ねた。長年の間、算を學んできたのに、近ごろ周髀を計算するが合わなので、自己嫌惡に陥っていたと言う。すると成公興は、自分の言う通りに布算してみてほしいと言うので、やってみるとにわかには解決した。寇謙之は嘆服し、彼に師事したいと請うたが、彼は固辭し、寇謙之の弟子にしてくれと申し出た。

まもなくして、成公興は寇謙之に隱遁して仙術を學ぶつもりはないかと誘い、三日閒潔齋戒させた後に、彼を連れて華山に入り、一緒に藥草を食べさせた。すると飢えることがなくなった。さらに高山に入り、三層の石窟で神仙の修行をする。その後の話では、成公興が實は失火の罪によって仙界から追放され、七年間寇謙之の弟子になる刑罰に服していた、いわゆる謫仙であることがわかる經緯を記すが、ここでは省略する。

寇謙之が行った七曜算というのは、天文占のための日月惑星の軌道計算であると考えられる。「周髀を算する」とは、狹義には『周髀算經』に展開されているノーモンによる日影を用いた三角測量術のことであるが、ここで

は天體運動の數理計算（星算）を指している。なお、殷紹も「九章、七曜に達する」と述べられている。

寇謙之が高山で修行をして體得したのは、服氣、導引、辟穀等の長生術である。成公興の通じている「九章」「周髀」の算術は、今日的な意味合いでの純粹數學であり、長壽を得るための仙術に近似しているわけでは決してない。しかし、七曜の布算によって、成公興の神仙的能力の一端が發揮されるというところに、算術と仙術の微妙な関係がある。

數學者として當時の人々に知られていた成公興との不思議な出逢いは、寇謙之が神託を受けて教祖となるにふさわしい傳説であつて、それがどれほどの史實を反映しているのか、詮索しても仕方がない。しかしながら、二人の交際の信憑性がどうであれ、數學の達人が謫仙に同一視される概念装置が、純粹數學と神仙術との間に存在したことは確かなことである。宗教的な神祕性の源泉として、數學という學問が力を發揮すると人々に受け止められていて、術數的な興味を持った人物が數學を研究しようとしていたのである。租稅計算等の實用面ばかりではなく、數の神祕を解き明かす役割を數學に強く求めるようになった背景には、宗教教團の制度的な確立と社會的浸透とともに、術數學への興味の高まりがあるように思われる。

## 二

『九章算術』をバイブルとした數學研究のサークルが、釋老二家の相互交流を通して成立していたことは、奇異な感じがするが、それは彼等の傳記や著作がほとんど残っていないせいであるにちがいない。そこで、當時の算術書において、もう少し實證的な考察をおきたい。



北魏には、安豐王延明が數學や天文律曆學に強い關心を抱いていたことが知られている。

安豐王延明は、博學多聞で圖籍萬餘卷を鳩集したが、五經の數學關連の事柄を抄集して「五經宗」を著し、古今の樂事を集めて「樂書」を著そうとし、また渾天儀、欽器、地動儀、銅鳥漏刻、候風儀などの科學器械を集め、圖解して「器準」を著そうとした。河間に信都芳という數學者がおり、彼を館に招いてその推算を行なわせたという。そして、安豐王延明が内紛で南奔した後に、信都芳は自ら「器準」を刪定し、詳しい注釋を施した。また「重差、句股」にも注釋したとある（『魏書』二〇、九一、『北齊書』四九、『北史』一九、八九）。

句股術というのは、『周髀算經』『九章算術』句股章に展開された三平方の定理の應用術（數値二次方程式）や三角測量的な相似計算である。また、『九章算術』の注釋者である劉徽は、『周禮』の九數にある重差術を補う目的、『海島算經』を著わした。この「重差、句股」がそれらの數學書であるかどうかはわからないが、類似した算術であったとみて間違いはない。

南朝では、祖沖之（四二九―五〇〇）が出て、『九章算術』を研究し、劉徽の數學をさらに發展させて、精度の高い圓周率算定等の大きな數學的業績を残した。南北兩朝で、『九章算術』を始めとする數學研究が盛んになったことは、偶然ではなさそうである。

現存する『算經十書』のなかで、北魏の時代に著された數學書と考えられているのは、『張丘建算經』である。著者は自序に「清河張丘建」とあるだけで不詳であるが、錢寶琮の考證によれば、『張丘建算經』卷中に、各戸に絹を出させるのに貧富の差に従って（等差が二丈の）九等に分ける設問があるのが、顯文帝天安元年（四六六）に施行され孝文帝太和九年（四八五）に廢止された三等九品の戸調法（『魏書』食貨志）であるとし、その間に成立したと推定する<sup>①</sup>。

自序には、「其の夏侯陽の方倉、孫子の蕩杯、此等の術未だ其の妙を得ず。故に更に新術を造り、其の理を推盡し、之を此に附す」とあり、『夏侯陽算經』『孫子算經』の名を擧げており、北周の甄鸞（五三五―五六六頃）や唐の劉孝孫が注釋を施しているから、時代的にはちょうど符合するように思われる。

『夏侯陽算經』『孫子算經』には數理を盡くしていないところがあるので、新術を造ったと述べていることについて、「孫子の蕩杯」とは『孫子算經』卷下（第一七題）にある次の設問を指す。

今、婦人が河のほとりでお椀（「椀」又は「杯」）を洗っていた。渡し場の役人が「どうしてそんなにお椀が多いのか」と尋ねると、婦人は「家に客人がありましたので」と答えた。役人は「客人は何人か」と尋ねると、婦人は「飯は二人で、羹は三人で、肉は四人で（一つのお椀を）共にします。全部でお椀は六五椀用いました。客人の數は存じません。答えは六〇人。

客人の總數をXとすると、

$$(1/2+1/3+1/4)X=60$$

という方程式を解く問題である。左邊の分數を通分した $13/12$ の逆數をお椀の總數六五椀に乗じれば求まる。『孫子算經』の解法公式は、

六十五椀を置き、一十二を以て之に乗じ、七百八十を得、十三を以て之を除すれば、即ち得。

とあり、一二、一三という數値がどうして出てくるのか、つまり方程式の左邊にある分數を通分する過程が省略されている。これに對して、『張丘建算經』卷下（第三七題）では、

共杯人數を右方に列置し、又共杯數を左方に置く。人數を以て互いに杯數に乗じ、併せて法と爲す。人數をして相乘じ、以て杯數を實と爲す。實、法の如くして一を得。

とあり、分數の分母（「共杯人數」二、三、四）と分子（「共杯數」一、一、一）を算盤の左方、右方において互乘し、通分する方法を明記している。後者のほうが、より一般解としてすぐれていることは言うまでもない。

「夏侯陽の方倉」については、『夏侯陽算經』は、『算經十書』に収録された現行本ではない。現行本『夏侯陽算經』は、兩税法等の唐代に施行され始めた税制計算が扱われており、唐の韓延が著わした算經を、北宋元豐七年の刊刻時に誤って入れたものであると考えられている。韓延算經の冒頭には、「夏侯陽曰く」と、『夏侯陽算經』からの引用があるから、それが書名と間違えたのであろう。

『張丘建算經』を『孫子算經』と内容的に比較すると、解法公式の補正にとどまらず、内容的に類似する設題が少なからず存在する。しかも、數理的に少し複雑にした應用問題となっている。さらに、序文には書名があがっていないが、『九章算術』に依據する應用問題と思われるものも數多く見いだすことができる。

そのことを議論するのは、本稿の目的ではないので別の機會に譲るが、いずれにせよ従前のいくつかの數學書を基礎にして應用問題を工夫していることは明らかである。そこに、當時の數學研究の高まりを推察すべきである。隠棲している人物でありながら『九章算術』を學んだことが史書に記録されるのも、そのことを裏付けているように思われる。

もしそうであるならば、設問、解答と最終的な解法公式を記した數學問題集だけしか残されておらず、研究者集團の實像がほとんどつかめない中國數學の歴史において、そうしたことが指摘できる稀有な事例である。數學的な業績ばかりに目を向けていると氣がつかないことが、術數學との關連性を調べることで、思いがけない事實が浮かび上がることもあるのである。その好例であることを、ここではつきりと指摘しておきたい。

ところで、殷紹が法穆、曇影から傳授されたという「黃帝四序經文」については、殷紹の序文によれば、史遷、郝振の中古大儒に撰注があつて世間に流布しているとあり、その缺けた所を補つた彼の著作も大いに世に行われたということであるから、當時にもてはやされていた術數書の一つであつたことがわかる。

その構成と内容は、孟・仲・叔・季の四序各九卷八一章に分かれ、全三六卷三二四章からなる。全體の内容は、「専ら天地陰陽の本を説く」とし、孟序は「陰陽配合の原を説く」、仲序は「四時の氣の、王・休・殺の吉凶を解す」、叔序には「日月辰宿交會相生して表裏を爲す」、季序は「六甲の刑禍福德を釋す」とある。

それらの記述から推察すると、隋の蕭吉著『五行大義』に類似した内容である。數學との直接的な關係は、もちろんそこには見いだせないが、學ぶ側には『九章算術』から「黃帝四序經文」という流れがあつたのであるから、兩者を結合させている何らかの數觀念がそこにあるはずである。それが、おそらく當時の人々を魅了した「數學」ということになる。

『五行大義』卷一では、五段に分けて「數」の原理を説いた論數篇がある。その後では、五行の作用による四季の氣の變化に着目した「四時の休王」の相互關係や十干十二支（六甲五子）の五行配當説を定義から詳論し、占術を行う方法の基礎理論を説き明かす。だから、論數篇は、世俗的な占術を「數の學」に高めている、中國術數學的な數學原論を展開したものと言つていいだろう。

論數篇の五段の冒頭は、「大行より起こし易動靜數を論ず」という章目になっていることからわかるように、依據する原理は、易數である。しかし、ここで注意しなければならないのは、そこで述べられている大行數や八卦

は、易占を成立させる筮竹數や構成要素にちがいないが、だからといって五經の首である『易』そのものではない。しかも易學と易占とは次元を異にすることは当たり前前のことであるが、だからといって易數の聖俗關係をきっぱりと分離してしまうわけにはいかない。なぜならば、自然哲學と占術の兩面性を保有しているからこそ、『易』がバイブル視されているからである。

その複雑な關係は、算術と占術においても同様のことが言えるだろう。それらの曖昧模糊とした關連性は、『易』から派生したものとして主張される術數學の學問的輪郭を把握しようとしても實に捉えがたいものになっている。しかしながら、そこに人々を信じ込ませる數術の本源があると考えられるのだから、廣義の「數學」として捉え直すには、絡み合ったものを少しは解きほぐさないわけにはいかない。

そこで唐以前の算術書を集録した『算經十書』を通覽すると、占術あるいは釋老一家との關わりが見いだすことができるのは、『數術記遺』と『孫子算經』である。『數術記遺』については、後漢末の徐岳に假託したものであり、李淳風の編纂した「十部算經」に入っていたわけではなく、宋代に補入したものであるから、考察對象とすることに躊躇せざるを得ない。

一方、『孫子算經』には、注目すべき設問がいくつか含まれている。

下巻の第四問に次のような設問がある。

今佛書がある。全部で二十九章、章ごとに六十三字である。問う總字數はいくらか。(今有佛書凡二十九章、章六十三字。問字幾何)

佛典の總字數を算出する問題である。この他に佛教文化に關わる内容の設問があるわけではない。しかし、『算經十書』のなかで、特定の社會集團との關連性を明示する内容の設問は稀有であるだけに、單なる書物とせず

佛書と限定していることが、かえってその親近性をはっきりと告白しているように思われる。

『孫子算經』の成立は、卷下、第五問で一九道の碁局を扱っていることから、一七道から一九道に変わった晋末から南北朝の初めであると推定されている。<sup>④</sup>それは、佛教が民間に広まり始まる時期にちょうど重なっている。

さて、最も注目されるのが、卷末にある次問である。

今妊婦がいる。年齢は二十九、孕んだのは九月。生まれる子の性別はどちらか。

答に言う、男が生まれる。(今有孕婦、行年二十九、難九月。未知所生。答曰、生男)

胎兒の性別判断の推算術である。解法公式によれば、定數の四九に難月(孕み月、一説に産み月)を加え、年齢を引く。その餘りに、天一・地二・人三・四時・五行・六律・七星・八風・九州の數字を順に引けるだけ引き、餘った數が奇數なら男、偶數なら女となる。四九に難月九を加えると五八、年齢二九を引くと、二九になる。二九から一、二、三、四、五、六、七まで引いていくと、一餘る。奇數だから答えは男、となる。

このような怪しげな數術が『算經十書』に展開されているわけではなく、これが唯一の例外である。

定數四九には何の説明もないが、一から九までの數については、『淮南子』地形訓等に見られる動物の在胎期間に関する數理に符合している。そして、『大戴禮記』易本命、『孔子家語』執轡では、それが易理に基づくものとして、いることから見れば、定數四九は易占に用いる筮竹數に依據するのではないかと思われる。そうであるならば、算數と術數と易數の三數がここに會合しているのである。

#### 四

『孫子算經』の推算術は、明代の算學啓蒙書である『算法統宗』卷一七にも「孕推男女法」として收められているように、數學的な根據のない愚問として否定されるというわけではなかった。實際にどれほどそれが用いられたかはわからないが、近代の初めまで中國や日本にもっと簡単な男女産分けの算法が残っていたことが、民俗調査によって報告されている。

そのような推算術が生まれ、習俗に定着する背景には、妊娠三ヶ月目に胎兒の性別が決定されるとする考え方が長い間信じられていたことによる。すなわち、十ヶ月間の妊娠期間における胎兒發育の過程において、妊娠三ヶ月目にはまだ胎兒の形態は定まってはならず、妊婦が見たものに感應して變化するとし、男の子が欲しければ、弓矢を手にし、雄鶏を射たりするなどし、女の子が欲しければ簪や珠玉を身につけるなどするとよい、といったまじないめいた妊婦の心得が、食物の禁忌や醫療の仕方とともに唱えられた。胎教の重要性が賈逵『新書』胎教篇及び『大戴禮記』保傅篇等で、古くから唱えられたのも、そうした醫學的な胎兒發育觀があったからである。

『諸病源候論』卷四一、婦人妊娠病諸候上、三妊娠轉女爲男候には、

この時は男女未分の時である。だから、妊娠して三ヶ月未滿ならば、服藥や方術で性別を轉換して男を産ませることができる。(是時男女未分、故未滿三月者、可服藥方術轉之、令生男也)と述べられているように、醫書レベルでも變成男子の術の有効性が明言されている。

『博物志』卷一〇、雜説下には、その方術の一例がある。

妊娠して三ヶ月未滿の妊婦が、夫の衣冠を身につけ、平旦に左回りに井戸を三周し、(水面に)自分の假影を映して立ち去る。振り返ってはならない。人に知られたり、見られたりしてはいけない。そうすると、必ず男を生むことができる。(婦人妊娠未滿三月、著墜衣冠、平旦左遶井三匝、映詳影而去、勿反顧、勿令人知見、

## 必生男)

周日用の注には、性別推算術への言及がある。

(胎児が)女とわかれば、この方法に依るべきであるが、最初から男であるならばどうするのか。私は、(胎児の性別を知る)定法があると聞いている。すなわち、母親の生年月日と受胎時日を定め、これを計算して、奇数になれば男であり、偶数になれば女である。女であることを知った後に、すなわちこの(男を生ませる)方法に依るべきである。(周日用曰、知女則可依法、或先是男如何。余聞有定法、定母年月日與受胎時日、算之、遇奇則爲男、遇偶則爲女、知爲女後即可依法)

醫書の胎兒發育説は、他の醫書や道教、佛教關係の著作においても、類似した説が唱えられており、人々に廣く浸透したが、その起源はきわめて古く、内經醫學が成立する前の先秦期まで遡ることが、馬王堆漢墓から出土した『胎產書』によって判明した。馬王堆出土醫書には、胞衣を埋める方位と壽命の關係を圖解した南方禹臧圖を始め、胎產の醫療やまじないが大いに論じられている。しかも、隋唐以降の醫書に見られるものと、きわめて近似しており、核となる部分が大きく變化することなく、先秦から中世以降に時を隔てて綿々と語り繼がれていることがはつきりした。そのことは、この分野の特質である理論的な繼續性を示唆するものである。

ところで、平安時代の永觀二年(九八四)に丹波康賴が朝廷に奉った『醫心方』は、全三〇卷からなるが、卷二二から二四までの三卷には、妊娠期や産後の婦人病に關する醫説が、様々な書物から寄せ集められている。今日の産婦人科に屬する醫療内容もあれば、術數的なまじないも含まれている。

抄出した引用書で、最も多いのは『産經』である。『産經』は、『日本國見在書目錄』に「産經 十二(卷)、徳貞常撰、産經圖 三(卷)」とあることが知られているだけで詳しいことはよくわからない。



引用された『産經』の論説には、馬王堆出土『胎産書』や『諸病源候論』とほとんど同じ胎兒發育説があり（卷二二、妊婦脈圖月禁法第一所引）、さらに『孫子算經』とほとんど變わらない性別推算術も存する。すなわち、『醫心方』卷二四、知胎中男女法第三の引く『産經』に、次のようである。

欲知男女筭法、先下夫年、次下婦年、仍下胎月、正月胎下筭十二、月竝取十二、月筭合數、仍除天一、又除地二、又除人三、又除四時四、又除五行五、又除六律六、又除七星七、又除八風八、又除九章九、候〔奇〕即男、偶即女、萬無參差。

それによれば、胎兒の性別を占う胎産のまじないがあつて、それが算術的にアレンジされ、『孫子算經』に紛れ込んだのである。その過程はよくわからないが、同類の算法が『産經』にあつたということに、その社會的背景を探る手がかりが残されている。

『産經』では、胎兒の男女を知る法として、前期の推算術に加えて、式盤の一二神と父母の年齢、懷妊した時の年齢などで占う法を記載する。それらの外に、『諸病源候論』『千金方』と同じような左右の脈による診断法も述べられており、他所では經方書と同様の藥療の處方を様々に論じているから、まじない一邊倒というわけではない。胎産に關する諸説を、醫療とまじないの區別なく、網羅的と思えるほどに集録したために、醫書の枠からはみ出ているような占法まで收められることになつたのである。

『産經』は、援引する書名をそのまま明記しているものがある。そのなかには、『湛餘經』（第二四、爲生子求月宿法第三）、すなわち『四序堪輿』の類似書からの引用がある。さらに、『佛家大集經』（卷二四、生子廿八宿星相法第一二）、『龍花經』（占推子與父母保不保法第二四）といった佛典を装うものが含まれる。<sup>9)</sup> 中世の醫書には、佛僧の著作も數多く存し、名僧の耆婆の名を冠した書も少なくないから、それだけでは驚くに値しない。しかし、それらの内容が

二八宿や干支による占術であり、術數書と差異のないものであってみれば、佛教文化と術數學の接近した距離を感じないわけにはいかない。

胎産を論じる諸説を窺うと、道教や佛教の呪言によるまじないを典型として、『産經』だけではなく、宗教的な色彩が強く見受けられる傾向がある。胎産醫療においては、道教と佛教が方向性を異にすることなく、混在している。『産經』では、さらに術數書まで援引して、集成的な試みを果たしているのである。

卷二三、藏胞衣斷理法第一五に引く『産經』には、胞衣のおさめ方を説いた末尾に「此は黃帝百女占中の祕文なり」とあり、次の藏胞衣吉凶日法第一五の引用文には、牢日に胞衣のおさめると小兒は死んでしまうと述べた後で、「牢日法は湛餘經中に在り」とコメントする。つまり、占術を行う盤上の世界において、佛教や道教の神々が迷える人々を救うために結集しているのである。

『隋書』經籍志にも「産經」という書目が記されているが、醫家類でなく、殷紹の『四序堪餘(輿)』と同じ五行類に分類されている。その前後には「六甲貫胎書」「産乳書」「推産婦何時產法」「推產法」「推產書」「生産符儀」「産圖」「雜産圖」といった書物が列記されている。そのように胎産の醫療やまじないは、術數的な色合いがきわめて強いところがあった。

中國では、古來から婦人病や小兒病が治癒しがたい病氣であることを認識し、それだけを獨立させた專書を扱ってきた。しかしながら、受胎や胎兒の生育に關する醫學知識が明確になったのは、近代に入ってからのものである。懷妊から出産に至るまでの胎産期や嬰兒期における病は、最も醫者の手に負えない難病であったにちがいない。しかも、當時は今に比べて出生兒や妊婦の死亡率がきわめて高かったわけであるから、出産の無事と嬰兒の健康を願う氣持ちは切實なものがあり、今日で見ればまじないでしかない方法に頼らざるを得なかった。しかも、

世の常として生まれてくる子の長壽を祈らない親はいないから、「産經」で取り扱う中身が、術數的なものを多く含み、五行類に類別されることになるのも、首肯できることであるだろう。

### 結びにかえて

南北朝に分裂した頃は、道教史でも、佛教史でも、一つの轉換期となっている。北魏で新天師道が國家的宗教の地位を獲得した後、しばらくして南朝では茅山を中心とする上清派の道教教團が形成される。一方、佛教も次第に國家の擁護を受けるようになる。北でも南でも、西域から傳來した佛教が中國に定着し始め、それに拮抗する形で道教が飛躍していく時代なのである。

北魏においては、太武帝（在位四三三—四五二）が寇謙之等の進言を受け入れて新天師道を北魏の國教とし、大々的な廢佛を行った。その後も道佛二教に儒教を加えた三教は、政治的な動向では互いに霸權抗爭を繰り返した。そのためその對立面だけが浮き彫りにされるが、沙門と道士が相互交流を行い、弟子に學問を傳授しているように、三教の知識人の間では融和的な關係も存在し、自然科学や術數學を包含した知識が交叉する場が成立していた。

道教も佛教も、初期段階では、長生術を基軸にした神仙思想と大いに接近していたことは、しばしば指摘されている。また、醫藥學についても、大いに活躍した道士、僧侶がいたこともよく知られており、その分野の指導的な立場となっていた。北魏で例言すれば、李亮という醫者が沙門の僧坦に就いて醫術を學んで、大いに腕を上げた（『魏書』九二）という具合である。

ところが、術數學との關係については、「術數、禁呪に通曉していた」曇摩讖が人々の安危を救った（『魏書』一

一四)という類の逸話が取り上げられるくらいで、どちらかというとな神怪、俗信と見なされて脇に置かれる傾向にあった。

しかし、世俗の視線で見るとすれば、摩訶不思議な術數的世界と結合した文化基盤の上で、宗教家達の姿をそのように眺めていたことは事實であり、あるいは占術以上に熱い眼差しで救済の奇蹟を期待していたのである。とりわけ、本稿で見たように、まじないと分離しがたい胎産醫療のような場においては、神頼みをする人々に生きる知恵を授けようとして、醫學的知識が寄せ集められ、さらに本来まじらないとは無縁の純粹數學の算術が數術として合體し、さらに道教、佛教の神々まで驅り出される。

つまり、術數學が生み出した時空において、當時の科學、易學の理論と宗教文化の構成要素が習合し、人々に何らかの信仰と行動指針を與える力を供給しているのである。それは、科學知識が人々に浸透していく過程に特有の現象であり、科學と宗教との理論的な結節点になっているのではないかと考えられる。そのように考えれば、中世の術數學の果たした役割は、これまで佛教史、道教史、科學史のいずれもが見逃してきた盲点であるように思われる。

- (1) 塚本善隆『魏書釋老志の研究』(佛教文化研究所出版部、一九六一年)、横超慧日編『北魏佛教の研究』(平樂寺書店、一九七〇年)を参照した。
- (2) 錢寶琮校點『算經十書』下冊、張丘建算經提要(中華書局、一九六三年)参照。
- (3) 『張丘建算經』『孫子算經』の成立年代及びその内容については、錢寶琮校點本及び『李儼・錢寶琮科學史全集』(遼寧教

- 育出版社、一九九八年)に再録された諸論考のほかに、吳文俊主編『中國數學史大系』第四卷、西晉至五代(北京師範大學出版部、一九九九年)、紀志剛編『孫子算經／張丘建算經／夏侯陽算經導讀』(湖北教育出版社、一九九九年)を参照した。
- (4) 前注参照。
- (5) 拙稿「胎兒の性別を推算する術——數の豫言力」(横山俊夫編『言語力の諸相——試行的共同研究報告——』、京都大學人文科學研究所、二〇〇〇年)参照。
- (6) 永尾龍造『支那民族誌』第六卷、兒童篇上卷、第二篇、第二章「胎兒の性別を判斷する方法」(東方文化書局、一九七一年)、『日本產育習俗資料集成』(第一法規出版、一九七五年)参照。
- (7) 『異苑』卷八にも同類文がある。ここでは、「映影而去、勿反顧、勿令人知見」は、「映井水詳觀影而去」、「勿令人知見」は「勿令墮見」に作る。
- (8) 杉立義一『醫心方の傳來』第三章(思文閣出版、一九九一年)、馬繼興『馬王堆古醫書考釋』(湖南科學技術出版社、一九九二年)に詳しい考察がある。
- (9) 『醫心方』卷二、針灸服藥吉凶日第七にも、『堪輿經』の佚文が二條見られる。
- (10) 『醫心方』卷二三、治產難方第九には、『大集陀羅尼經』の神呪が記載されているが、『大集經』と同一書であるかもしれない。

## CONTENTS

### *Preface*

- Filial Piety and Buddhism in China. YOSHIKAWA Tadao ..... 1
- The Authentic Parent in Daoism in Relation to the Virtue of Filial Piety.  
MUGITANI Kunio ..... 19
- Breaking the Precepts and Committing Heresy in Buddhism of the 5th and  
6th Centuries. FUNAYAMA Toru ..... 39
- The Formation of Daoist Monastic Discipline as Seen in the *Dongxuan ling-  
bao qianzhen ke* and the *Sifenlü shanfan buque xingshi chao*.  
TSUZUKI Akiko ..... 59
- Daoist Jātaka in the Lingbao Scriptures of the Six Dynasties.  
KAMITSUKA Yoshiko ..... 83
- A Historical Study of *Tongru* in Medieval China. KISHIMA Fumio ..... 107
- Reexamining the Role and Position of the *Dujiang*.  
KOGACHI Ryuichi ..... 141
- Wang wei's* Landscape Poetry and Painting under the Influence of the Sixth  
Patriarch *Hui neng*. ARAMAKI Noritoshi ..... 163
- Mathematics and Numerology: The Merging of Science and Religion in  
Medieval China. TAKEDA Tokimasa ..... 203

# Religion in Medieval Chinese Society

edited by  
MUGITANI KUNIO

DOKISHA  
2002

## 執筆者紹介

吉川忠夫（よしかわ ただお）	龍谷大學文學部教授
麥谷邦夫（むぎたに くにお）	京都大學人文科學研究所教授
船山 徹（ふなやま とおる）	京都大學人文科學研究所助教授
都築晶子（つづき あきこ）	龍谷大學文學部教授
神塚淑子（かみつか よしこ）	名古屋大學情報文化學部教授
木島史雄（きしま ふみお）	愛知大學現代中國學部助教授
古勝隆一（こがち りゅういち）	京都大學人文科學研究所助手
荒牧典俊（あらまき のりとし）	大谷大學文學部教授
武田時昌（たけだ ときまさ）	京都大學人文科學研究所教授

## 中國中世社會と宗教

---

2002年4月12日 第1刷發行 非賣品

編者 麥谷 邦夫

發行者 麥谷 邦夫

發行所 道氣社

京都市左京區北白川東小倉町47

京都大學人文科學研究所麥谷研究室內

印刷所 中西印刷株式會社

---

ISBN4-9901215-0-3 C3022